

# 大山崎瓦窯 7 号窯発掘調査の資料

大山崎町教育委員会

調査回数：大山崎町第 63 次遺跡確認調査（7YYMS'SS-10 地区）

調査地：大山崎町字大山崎小字白味才 39-3

遺跡名：白味才遺跡、大山崎瓦窯 7 号窯

調査面積：50 m<sup>2</sup>

調査期間：平成 20 年 11 月 25 日～同年 12 月 24 日

調査主体：大山崎町教育委員会（生涯学習室）

## 1. これまでの経過

大山崎瓦窯は、平成 16 年から 17 年にかけて実施した第 56 次遺跡確認調査で検出された瓦窯群です。これまで平窯 6 基の存在が確認されています。窯の配置や出土した軒瓦の需給関係から、平安京および周辺の離宮・諸寺などの瓦を生産した国営の瓦作り工房と考えられています。この瓦窯は、平安京と周辺施設の形成過程や窯業史を解明する上で極めて重要な位置を占めており、平成 18 年 1 月 26 日に国の史跡に指定されました。

本町では、平成 17 年度から大山崎瓦窯の範囲を把握する目的で国庫補助事業として継続的に発掘調査を実施しています。今年度の調査は、史跡指定範囲の北隣接地の崖面裾部で、大山崎瓦窯 6 号窯から約 50m 北側の位置に調査区を設定し、約 50 m<sup>2</sup>を発掘調査しました。

## 2. 検出した遺構

平安時代では、瓦窯と前庭部（焚口前の作業空間）などを検出しました。

今回新たに検出した瓦窯は、7 号窯と名付けました。7 号窯は、燃烧室の横断面を調査区西壁で検出しました。窯は東に開口します。燃烧室の前半から前庭部にかけては、後世の崖面形成に伴う土坑状の落ち込みによって破壊を受け、大半は遺存しませんが、床面の一部が確認できます。燃烧室の側壁の遺存高は、南壁が 94cm、北壁が 74cm を測ります。内法は、170cm を測ります。

燃烧室（燃料を燃やす空間）の床面は 4 面の存在が確認できます。調査区西端から東 117cm の地点以東では、炭と焼土が交互に堆積しています。燃烧室床面と前庭部の堆積状況の変化点が焚口に当たるとみられます。この 7 号窯の位置関係は、2 号窯と同じ規模のようです。

前庭部は舟底状の断面形を呈し、全長は先述した焚口位置から東端まで 360cm を測ります。前庭部の底面は、南肩部の検出面から深さ 31cm を測ります。前庭部の堆積層は、窯からかき出された炭と焼土です。

### 3. 調査成果

今回の7号窯の検出によって大山崎瓦窯の範囲が北側に大きく広がることが判明しました。7号窯の位置は、6号窯の中軸から約48m北に当たります。その間の空間では、2度の発掘調査を実施していますが、瓦窯は存在しません。南の瓦窯群（南群）の2号窯から5号窯は、焚口を一直線に揃えて規格的に配置されていますが、7号窯の焚口位置は、その北延長ラインに一致します。つまり、7号窯は、南群と同じ割付によって配置されたことが知られます。出土した軒瓦も南群の瓦窯と同じものです。

おそらく、7号窯と他の未知の数基の窯によって北群の瓦窯群が存在するものと予測されます。このことは、大山崎瓦窯が開始当初から、いくつかの瓦窯群によって構成された大規模な国営の瓦づくり工房として操業していたことを示しています。また、それとともに、その供給地である平安京および周辺諸施設の造営体制が早い段階から機能していたことを示す物的証拠でもあります。この証拠をさらに調査・分析し、実態を明らかにすることは、窯業技術などの生産史の分野にとどまらず、日本の都の歴史を解明する上でも重要な位置を占めているといえます。





7号窯の燃烧室の横断面



焚口付近の断面の観察状況



炭と焼土が交互に堆積している

前庭部の堆積状況



出土した軒丸瓦



位置図



史跡大山崎瓦窯跡と周辺遺構の分布